

08 長崎県雲仙市 “寄りたくなるまち”を目指す-くにみ寄りまちツーリズム

What▶ #観光 #集落再生 #シビックプライド

お話を伺った方々



「TOKITOKI」にて。左から雲仙市 地域おこし協力隊の高見 正人さん、「TOKITOKI」オーナーの境 研伍さん（池田建築設計事務所副所長、株式会社 patina 代表取締役）、「神代文殊会」代表の前田 修一さん、「くにみそうめん 八多土神」店主の深堀 大亮さん。

まちなか再生プロデューサー
 一般社団法人 地域観光研究所 代表理事
 さかもと ひでとし
 坂元 英俊さん

行政
 雲仙市 観光商工部 観光物産課
 ひさもと こうた
 久本 康太さん
 雲仙市 地域おこし協力隊
 たかみ まさと
 高見 正人さん

民間
 「神代文殊会」代表
 まえだ しゅういち
 前田 修一さん
 「多比良文殊会」代表
 そのだ やすこ
 園田 泰子さん
 「TOKITOKI」オーナー
 さかい けんご
 境 研伍さん
 「くにみそうめん 八多土神」店主
 ふかほり だいすけ
 深堀 大亮さん

住民の手で地域の魅力を再発見し、新たな賑わいを

事業開始後にまず取り組んだのは、地域の魅力を再発見し、その魅力を地域の人々が自信を持って語れるようになるための徹底的な土台づくり。2つの地区が手を取り合って一体感の醸成を図り、点と点を繋いで、地域全体がともに成長していける流れを生み出し、持続的な発展の基盤を築いた。地域内外の交流も活発化し、新たな交流の芽が生まれつつある。

課題

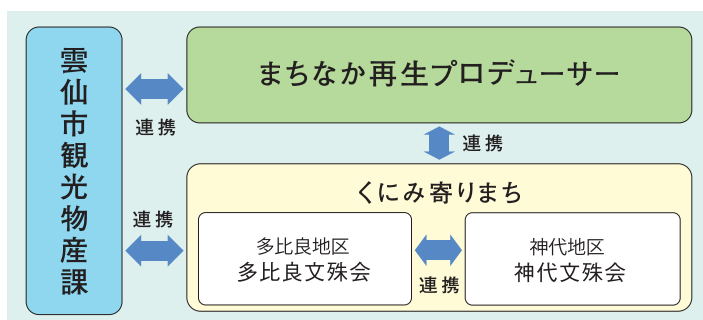
雲仙市国見町の^{こうじろ}神代地区は武家屋敷が残る歴史的地区として、^{たいら}多比良地区は商業の町として栄えてきた。人口減少、後継者不足、高齢化といった課題に加え、各地区の横断的協議の場が不足しており、商店街は活気を失い、交通網における利点（フェリー、バス、電車が通り、各地域との結節点になり得る）や地域資源が十分に活用されず、まちの賑わいも薄れつつあった。近隣の雲仙温泉、小浜温泉などの観光地との連携も不十分で、地域の強みを生かしていなかった。

目的

神代・多比良地区におけるまちづくり団体「^{こうじろもんじゅかい}神代文殊会」「^{たいらもんじゅかい}多比良文殊会」に対し、市が介入・支援することで横断的協議を行う場を設け、地域活性化を図る。歴史・文化や特産品などの地域資源、近隣の観光地を組み合わせ、「立ち寄りたくなる」仕掛けをつくり、回遊性創出や空き家・空き店舗活用を促進。商店街全体の売上向上や後継者のUターン・Iターン増加を目指し、長期的には地域の暮らしと観光が融合した「滞在型交流地域」をつくり出していく。

地域再生マネージャー事業 実施期間（2019年度～2020年度）

事業実施体制



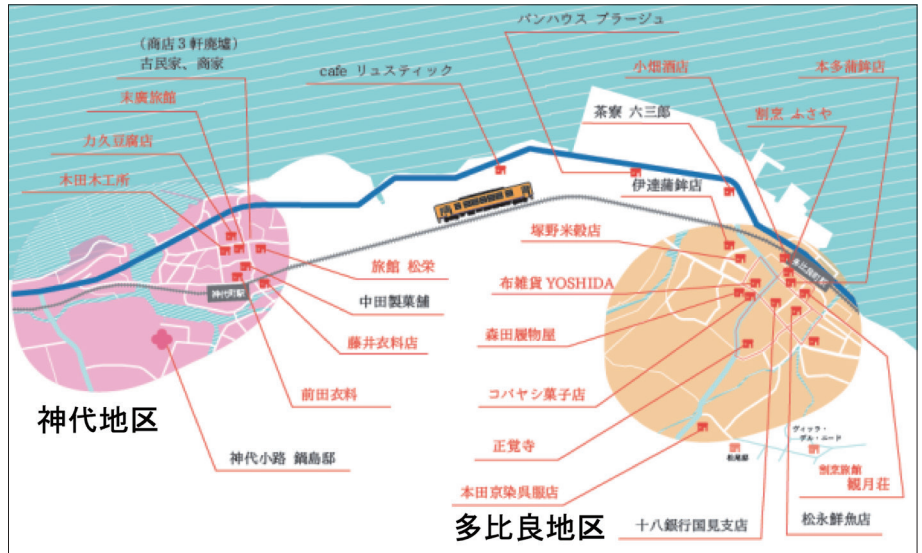
まちなか再生プロデューサーの坂元 英俊さんは、各事業の企画立案や採算性の検証、人材確保などのトータルのプロデュースと地域住民や市、企業関係者との調整役に従事。まちづくり団体「くにみ寄りまち」を結成し、各事業の運営を一任した。雲仙市は、全体の調整役を担うなどのサポート役にまわった。

事業実施内容

●意識醸成と方向性の確立

What — 何をしたのか？

まず初年度に両地区の一体感を図るためのまちづくり団体を結成。さらに、地域の人の理解を深めてまちづくりの方向性を模索するため、地域の問題点や魅力の掘り起こしを行った。さらにまちづくりへの考え方やノウハウなどを学ぶ機会を設けた。



(出典：2020年度まちなか再生支援事業 報告書)

神代地区は、旧領主の鍋島邸を中心とした武家屋敷群が往時の姿を留める歴史的なまち。多比良地区は、多比良港を基点にかつて渡海交通と物流で栄え、商店街の賑わいや寺社を中心とした地域文化が形成されてきた。両地区は島原鉄道で結ばれ、神代駅と多比良駅は隣接しており駅間は約6分となっている。

How — どのようにしたのか？

●地区の一体感を醸成する「くにも寄りまち」の結成(2019年度)

初年度に、神代・多比良地区の一体感を図るための組織として両文殊会による「くにも寄りまち」を結成。商店会員だけでなく、趣旨に賛同する国見町民であれば誰でも会員になれることを規定した。

「多比良には熊本と繋ぐフェリーの港、神代には国の重要文化財である武家屋敷があり、2つの地域は島原鉄道を架け橋にして繋がっています。両地区一体となって盛り上げていくことで、車で30分圏内の雲仙温泉や島原半島の各所からふっと“寄りたくなる”まちを目指しました。最終的には両地区が各商店街を核にした『滞在型交流地域』となることを、10年後のまちの将来像として描きました」(坂元さん)

●賑わい創出のための地域資源の掘り起こし

地域の問題点を知り、魅力を再発見する場として現地調査を行った。空き家や空き店舗の調査を行いマップ化したり、後継者がほとんどいない両地区の各店舗の現状(主力商品や商店の持続性など)を調査した。

「先にコースありきではなく、立ち寄れる場所を繋ぐことで初めてコースができる」という坂元さんの助言のもと、「観光スポット」として魅力的な風景や文化遺産などを両文殊会メンバーが調査・選定。それらを結ぶ散策コースの原型ができ上がった。また、「神代・多比良まちめぐりガイドブック」を作成した。

●「自分たちがやらなくては何も変わらない」。住民主体のまちづくりを行うための意識の醸成

住民主体でまちづくりに臨むためには、考え方やノウハウをまちの一人ひとりが学ぶことが必要だと考え、坂元さんや両文殊会メンバーが中心となり勉強会を計14回実施した。

「勉強会では、まず他人や機関任せにせずに“自分たちがやらなくては何も変わらない”ということを中心に共有しました。多比良は商売人のまちで、すぐに結果(利益)に結びつくことを考える。コロナ禍でそれぞれの商売も停滞し、イベントなどの集客が難しかったこともあって、取り組みに反対する声もありました。そんな中でも会を重ねることで『地域全体が魅力的になれば、必然的に利益に繋がっていく』ことを理解してもらいましたね」(園田さん)

「以前は、神代はこのまま衰退していくものと思っていたんです。でも勉強会などの取り組みを通して、神代には歴史があり独特な文化があることを再認識し、このまち並みを次の世代に繋ぐことが自分たちの役割だと意識するようになりました」(前田さん)

●滞在型交流地域を見据えた観光戦略

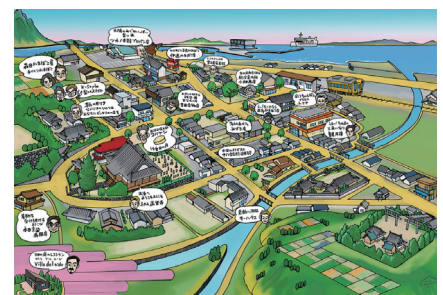
What — 何をしたのか？

散策コースの原型ができただけで、サイクリングを目玉とした広域連携を推進した。

How — どのようにしたのか？

●島原鉄道と連携し、鳥瞰図でまちをアピール(2019年度)

まちづくりの一貫として作った両地区の鳥瞰図(右写真:2017年度作成)を使用した広告を、「島原鉄道」と連携して車両内や駅構内に貼り出し、内外の人に向けて地



多比良地区の鳥瞰図。各店舗に店主や女将の顔とその施設の名物が描き添えられている。(イラスト:安楽雅志)

区の魅力を発信した（島原半島全域で一体感を出すため、島原半島観光連盟が作る島原半島全域のマップも、同じ鳥瞰図となっている）。鳥瞰図は、神代駅や多比良駅、商店街の各店舗にも掲示されている。

●両地区を周遊するサイクリングコースの検討・設定

「散策コースの原型はできたものの、拠点が離れていることもあって、『自転車だったらもっと周遊が楽しくなるよね』という話になったんです」（園田さん）

こうした意見を受け、2020年度には神代・多比良地区を周遊するサイクリングコースが作成された。

「多比良・神代地区は隣り合わせですが一方は商売のまち、もう一方は武家・文化のまちで基本的に商売はしない。地域性の違いから、これまでは共同で何かをすることは考えられなかった。周遊は、地元の私たちでは思いつかない発想でした。外から見ていただいたことがまちづくりの起爆剤になりましたね」（園田さん）

●旅行商品化を検討（2020年度）

旅行商品化を見据え、これまでの取り組みを集約したモニターツアー「くにも昭和ロマンと月の旅」（3泊4日：両地区の旅館に宿泊し、商店街を巡り、公共交通機関を利用して雲仙温泉まで脚をのばす）を行った。サイクリングでの周遊コースも行程に組み込まれた。

主な成果

●住民主体の交流拠点づくりと認定ポップの作成

現地調査で空き家・空き店舗の状況を把握できたことで、各個人が空き家の購入やリノベーションを考える契機となった。長年空き店舗となっていた「旧本田酒店」（神代）は、まちづくりに賛同したオーナーが自費でリノベーション。今後のまちづくりの拠点ともなりうる場所が、地域の人の手によって誕生した。事業2年度目からは「くにも寄りまち」認定店を示すポップを作成し、各店舗に掲げた。



改修後の「旧本田酒店」で行われた演奏会。2022年度には交流施設「趣蔵 神代ふれあい館」として開館。

●「滞在型交流地域」構想の構築

モニターツアーの実施により、今後の「滞在型交流地域」構想におけるヒントを得た。「実際にモニターツアーを実施してみると、地元をよく知る女将が案内してくれるからこそその見どころがたくさんありました。家主をお願いしてコース途中の古民家を見学したり、由緒ある神社でのお祓いを受けたりと、女将を通じた地域交流に可能性を見出すことができたのは、大きな一歩でした」（坂元さん）

●両文殊会によるイベント開催

初年度の取り組みによって、まちが目指すべき方向性やまちの魅力が少しずつ共有されたことが、両文殊会主催のイベント開催に繋がった。神代文殊会が「こうじろフェス」を、多比良文殊会が市の木にちなんだ「やまぼうしまつり」を開催。コロナ禍で思うような集客はかなわなかったものの、交流人口拡大に向けての一歩となった。



「くにも寄りまち」認定店を示す認定証を作成し、各店舗に掲げた。地元の木工作家が雲仙けやきを使い制作したものを。

まちなか再生プロデューサーコメント



PROFILE

一般社団法人 地域観光研究所 代表理事兼総務省地域力創造アドバイザー。阿蘇地域振興デザインセンター事務局長、島原半島観光連盟専務などを歴任。

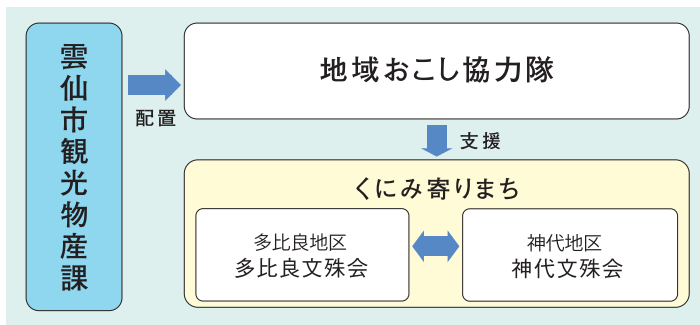
一般社団法人 地域観光研究所 代表理事 坂元 英俊さん

小さな成功の積み重ねが人を育て、まちを動かす

まちづくりの要は「地域を変えたいと本気で思っている人が現地にいるかどうか」です。2年間の事業でまちが大きく変わるわけではないので、事業後に地域の人たちがいかに活動を継続するかが重要です。事業開始当時、神代・多比良地区の方々は、なんとかしたいという強い思いがある一方で、突破口がなく困っていました。私たちが介入し、新しい視点を交えながら一緒にその土地の良さを再発見することで、地域の人たち自身がまちの魅力を理解し、解決策が見えてきました。人が成長すれば自ずと地域も育ちます。そのうえで、小さくてもいいので成功を地道に積み上げていく。それがまた別の人を動かし、まちを動かします。今、神代・多比良地区では、自走する方々の努力によって「10年後」として掲げたビジョンが少しずつ見えてきています。若者が移住して起業するなど、存続すら危ぶまれた地域に新たな変化が起こっているのです。

地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2021年度以降)

事業実施体制



現在は「くにみ寄りまち」による自主的な活動体制が確立され地域活動を推進している。市は地域おこし協力隊員を調整役として配置。

「各団体の活動支援や地域資源の発掘、情報発信に携わっています。地域の皆さんが大切にしてきたものを理解し、市や私に求められている役割を丁寧に果たしていきたいと考えています」(高見さん)

事業実施内容

●住民によるまちづくり活動の自走化

What — 何をしたのか？

事業終了後も、両文殊会が主体となって定期的にイベントを開催。継続による波及効果で長崎大学との連携に繋がった。

How — どのようにしたのか？

●「こうじろフェス」「やまぼうしまつり」の定期開催

神代文殊会主催の「こうじろフェス」は2025年10月の開催で23回目となる。「最近では鎮西学院大学ウエスレヤンジャズアンサンブルの演奏や地元のダンススクール『STUDIO ROLYPOLY』のステージなどもあり、地域に根付いたイベントになっています」(前田さん)

多比良文殊会主催の「やまぼうしまつり」は、多比良文殊会メンバーの様子を考慮しつつ、現在は不定期開催。

継続的なイベント開催により注目が集まり、長崎大学との連携も生まれた。経済学部のゼミ生が参加しともに企画を考え、実施(2021~2024年度)。「こうじろフェス」では、学生の提案で、元美容室の空き店舗を「神文堂」と名づけ、駄菓子と射的のお店にしたり、けん玉教室やクイズラリーを行うなど、地元の子どもたちに楽しんでもらうためのイベントを行った。「やまぼうしまつり」では、多比良名物を詰め合わせたお弁当を携えた「サイクリングピクニック多比良」や地元の人のおすすめルートを自転車で巡る「チャリ巡り」など主にサイクリングに特化したイベントを学生たちが企画。自転車を通じて地域のファンを増やすことに繋がった。



(上) こうじろフェスで企画された「神文堂」。地元の子どもたちが思い思いに駄菓子を選ぶ。(下) やまぼうしまつり開催風景。

●「サイクリストにやさしいまち」としての地域振興

What — 何をしたのか？

「サイクリストにやさしいまち」を前面に押し出し、サイクルツーリズムの拠点として、賑わいづくりを進めた。

How — どのようにしたのか？

●「ツール・ド・ニッポン in 雲仙」の開催

2024年度、雲仙市北部の国見町地区と瑞穂町地区を自転車で巡るイベント「ツール・ド・ニッポン in 雲仙」が、雲仙市主催により開催された。ツアーは「1泊2日」の行程で、宿泊や地元食材を使ったディナー、ガイド付きのサイクリングを組み合わせたスタイル。レースではなく、「旅とサイクリングの融合」を目的とした内容となっている。

地元農園での野菜収穫体験をはじめ、伝統的建造物群保存地区である神代小路や鍋島邸、観月荘、岩戸神社など、地域の観光スポットを巡りながら、両地区の魅力発信と観光振興を図った。

「サイクリングで多比良地区から神代地区までを周遊できます。両地区が互いに関わり合い、サイクリングを通じて地域の観光資源に触れてもらうことで、観光地として継続的に発展させていきたいです」(久本さん)

●地域の魅力に触れるレンタサイクルの推進

多比良地区では、自転車ラックの設置やレンタサイクルを推進した。「観月荘」では電動アシスト三輪車（タイヤ大）2台・電動アシスト三輪車1台・電動アシスト自転車5台・子供用自転車2台を備えている。また、サイクリングに特化した宿泊プラン（部屋に自転車ラックがあり、自転車を持ち込める）も用意し、サイクリストにやさしいまちづくりを後押しした。

主な成果

●「滞在型交流地域」の核となる拠点と民間プレイヤーの増加

現在、両地区では、観光の核となる拠点が生まれ、地域を担う民間プレイヤーも生まれた。

神代地区では、2021年度に一棟貸しの宿泊施設「TOKITOKI」がオープン。建築士の境 研伍さんが武家屋敷「旧伊藤邸」を購入し、改修した。「地元の国見町にUターンして、自分も何かしたいと思っていました。チェックインは駅前にある神代商店街のまえだ衣料品店さんに、朝食は松栄旅館さんをお願いしています。地域の人たちと交流しながら、ここが神代をめぐるきっかけになればうれしいです」（境さん）

2025年度には、旧みのつる資料館を改装した建物で国見素麺を扱った飲食店「くにもそうめん 八多土神」が期間限定でオープン。「私はサッカーの指導者でもあるので、サッカーによるまちづくりにも関わっていきたいです」（深堀さん）

多比良地区では、2024年度に園田さんが築88年の古民家をリノベーションし、一棟貸しの宿泊所「観月庵」としてオープン。多比良地区における分散型宿泊所のモデルケースをつくった。園田さんは、自らサイクリングのモニターツアーを行ったり、雲仙市全体の観光推進のために設立された「雲仙市観光局」の副理事も務める。それぞれが時に協働しながらまちづくりを行う姿勢が、少しずつ両地区に変化をもたらしている。



（左）「TOKITOKI」外観。四季が感じられる日本庭園も魅力。

（右）「TOKITOKI」の朝食。神代商店街にある「松栄旅館」が手がける、地元食材をふんだんに使った料理が届けられる。「武家屋敷地区で初の宿の開業にあたり、住民の皆さんに内覧会で丁寧にご説明し、応援してもらえるようになりました」（境さん）



（左）「くにもそうめん 八多土神」。夏季は神代小路の武家屋敷を食事場所として利用した。（写真は「中山邸」での食事風景）

（中）観月庵外観。雲仙市の木ヤマボウシをあしらったのれんがかかる。

（右）観月庵内観。

●サイクリングを要にしたまちづくりが進む

「ツール・ド・ニッポン in 雲仙」には、県外や海外から17人のサイクリストが参加。雲仙市が取り組む「サイクリストにやさしいまち」を県内外、国内外に周知する機会となった。

「サイクリングでまちを巡り、無農薬無化学肥料で育てられた地元農園の野菜を参加者が収穫してうちの旅館で料理して提供するなど、思い描いていた構想が形になったイベントでもありました」（園田さん）

自治体コメント

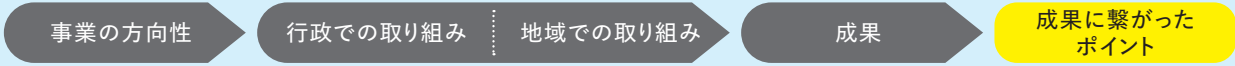


雲仙市 観光商工部 観光物産課 久本 康太さん

地域資源を生かし「プラスワン」の観光地に

事業を通して、地域の人たちが自ら立案し、継続して自走するきっかけが生まれました。一方で、継続は「マンネリ化」するおそれもあるので、それを打破するような対策が今後必要かもしれません。神代・多比良地区は雲仙温泉から車で30分圏内。多彩な地域資源を有するこの地区を雲仙・小浜温泉からの「プラスワン」の観光地として確立し、宿泊したり、立ち寄りたくなったりするような場所にしていきたいです。

取り組みのプロセス



マネージャー事業実施期間中

1年目 (2019年度)

地域資源、周辺観光地を組み合わせ、「立ち寄りたくなる仕掛け」をつくり、地域全体の回遊性創出や空き店舗の活用を促進する。商店街の売上向上、後継者のUターン・Iターン増加を目指し、まちの賑わいを再生する。

参加者のまちづくりへの思いや考えを聞き取り、調整役に従事。「一部の関係者の意見に偏りすぎず、広く全体を考えることを大切にしました」(久本さん)

「くにも寄りまち」を結成。店舗ごとの現状把握。空き家・空き店舗の状況把握と分布マップの作成。勉強会の開催。散策コースの検討・設定。

- 地域の人々がまちづくりにおける考え方をすることで「自分たちでまちづくりをしていかなくてはならない」という意識を持つきっかけとなった。
- 「神代・多比良まちめぐりガイドブック」の作成。

多くの勉強会や現地調査などで、住民自身がまちづくりの考え方や地域の魅力を知る機会を設けたこと。

2年目 (2020年度)

10年後を見据え、雲仙温泉との連携や島原半島全域を結ぶサイクリングコースの形成、循環バスに組み込まれる観光客増加を目標とする。第一段階として、両地区の商店通りを核に、滞在と交流を生む地域づくりを進める。

前年と同じく、調整役に従事。

- サイクリングコース検討・設定。地域商品の選定。研修会の開催。くにも寄りまち会員認定証作成。
- 両文殊会が、それぞれイベントを企画・開催。

- 初年度の散策コース作成から本格的なサイクリングコースの構築が始まった。
- 空き家・空き店舗を個人が活用するきっかけとなった。

住民が自発的にまちづくりへ踏み出す意識へ変化したこと。

マネージャー事業終了後

3年目 (2021年度)

「サイクリストにやさしいまち」としての地域振興を進めた。Uターン者によって宿泊施設「TOKITOKI」がオープンし、民間のプレイヤーによる新たなまちづくりの方向性を示した。

地域おこし協力隊を調整役とした地域活動支援。協力隊と情報共有し、助成金や相談があった場合は都度対応している。「地域の皆さんと一緒に盛り上げたいという気持ちを意識しています」(高見さん)

- 両文殊会がまちなかでイベントを継続して実施。
- 長崎大学経済学部ゼミ生が「こうじろフェス」や「やまぼうしまつり」で各種イベントを企画・実施(2021~2024年度)。
- 神代地区に一棟貸しの宿泊施設「TOKITOKI」がオープン。

- 両地区が自らの考えでまちづくりを継続したことが、長崎大学との連携に繋がった。
- 「TOKITOKI」の運営を周辺施設と連携したことが、神代地区の回遊性を高め、エリア全体の新たな価値創造に向けたモデルとなっている。

●住民自ら考え、自走化できるまちづくり活動を継続したこと。
●継続的な活動により、新しい人の流れが生まれたこと。

4年目 (2022年度) 以降

「サイクリストにやさしいまち」としての地域振興を引き続き進めている。空き家を活用した民間のプレイヤーによるまちづくりが広がっている。

- 引き続き、地域おこし協力隊を調整役とした支援を継続。
- 「ツール・ド・ニッポン in 雲仙」を開催(2024年度)。

- 神代地区に「趣蔵 神代ふれあい館」が開館(2022年度)。
- 多比良地区に一棟貸しの宿泊施設として「観月庵」がオープン(2024年度)。

両地区の自発的なまちづくりがますます活発になり、人が集まる場所や滞在型交流地域の核となる拠点ができた。

地域の人々が、地域全体の魅力を高めることの意味を理解し、且つ個々の考えを実現していく力を蓄えていったこと。

2024年度までの実績

2021年度に神代地区に「TOKITOKI」、2024年度に多比良地区に「観月庵」が開館。滞在交流の拠点の整備が進んだ。また、2024年12月には雲仙市主催により雲仙市北部の国見町地区と瑞穂町地区を自転車でするイベント「ツール・ド・ニッポン in 雲仙」が開催され、国内外17人のサイクリストが参加。さらに、神代文殊会主催の「こうじろフェス」は2025年10月の開催で23回目となる。原則、偶数月の第3日曜日に開催するスケジュールを決めたことにより、地域での認知が定着している。